

# 幼児の社会性の発達に関する研究（Ⅰ）

— 社会的スキル訓練を通して —

鈴木 順和・脇 孝子・米 倉 春 良

## The Development of Social Nature in Preschool Children (I) : An Application of Social Skills Training

Toshikazu SUZUKI, Takako WAKI and Haruyoshi YONEKURA

### Summary

To develop social skills in early childhood is necessary for children because peer relations play an important role in the development of preschool children, just as they do in the development of school children. The purpose of this study was to develop children's social behavior and promote their adaptation to the school environment by applying social skills training. In an intermediate age class of kindergarten, 28 children were coached in social skills by the class teacher : verbally initiating to a peer ( s ), responding to another child's initiation, offering support to peers, and so on. Social assessments by sociometric test, personality test and behavioral observation were conducted three times during the training. Social skills training enhanced children's social interaction and enriched peer relationships. Moreover, children's personality changed in emotional and social aspects ; especially, exhibitionism and aggression were significantly reduced, and self-control was significantly promoted. The results are interpreted as support for the effectiveness of teacher intervention and the training effect of enhancing the adjustment to peer groups and school environment.

本研究は宮崎県私立幼稚園連合会の教師研修大会での発表のために行われたものである。最近では子どもの数が少なくなり、一人っ子が増えている。また、住居の様相も変化し、都市部だけでなく郡部においても高層住宅に住む子どもが増加している。こうしたことから、他の子どもとの関わりがなくなり、社会性の乏しい子どもがみられるようになったという指摘が近年なされてきている。しかし、このことは今の子どもたちが昔の子どもに比べて早くから幼稚園や保育園で集団生活を経験していることと考え合わせると、矛盾する現象であるともいえる。事実、鈴木(1991)の研究において現代っ子の方が高木・坂本(1962)の調べた子ども達より社会性の高いことが示され、幼児期から既に友人関係が家庭内の親子関係と同様に性格形成に大きな影響をもっている

ことが指摘されている。このことから知られるように、現代においては幼稚園や保育所といった集団生活の場が子どもの社会性を伸ばす重要な生活の場となっており、そこでの生活経験は子どもの社会性の発達に大きな影響を与えと考えられる。それ故、問題となっている社会性の乏しさの原因の1つは、幼稚園等での生活経験が必ずしも子どもの社会性を十分に伸ばしきれていないことにあると思われる。そこで、本研究では幼稚園を対象を選び、幼稚園での教師の園児に対する関わりによって子どもの社会性がどのように伸びていくかをみていくことにした。

ところで、近年子どもの社会性を捉えるときに社会的スキル (Social Skill) という概念でみていくことがある (Rinn & Markle, 1979)。これは社会性が「グローバルなパーソナリティ特性ではなく、学習性の行動である」という意味をこめてあえてスキルという言葉が用いられる」(Michelson et al., 1983) からである。Mize & Ladd (1990) は、就学前の子どもにとって社会的スキルの訓練を受けることが必要である、と指摘している。その理由として、小学校に上がる以前の子どもにとっても仲間が子どもの発達に重要な役割を果たし (Hartup, 1983; Mize et al., 1985)、しかも就学前児の社会的能力や仲間による受容にみられる個人差が小学校入学後も安定して残ることを挙げている (Ladd & Price, 1987; Waldrop & Halverson, 1975)。もう1つは、就学前児の仲間集団は児童期にみられるようなギャング集団と違って他のメンバーの仲間への受容が得られやすく、集団内の子どもの地位を変容させることがより年長の子ども達に比べて成功しやすいことにある。さらに、就学前期では学業成績よりも社会性の発達を重視しているために、幼稚園等での生活経験そのものが社会的スキル訓練を進めやすくしてくれる点を挙げている。

そこで、社会的スキル訓練 (Social Skills Training) を通して子どもの社会性を伸ばしていこうとする試みを行うことにした。その場合、幼稚園における人との関わり合いは最初教師との信頼関係が基盤になると考えられる。そうした信頼関係によって新しい場での安心感が得られ、次に周りの子どもに対しての関係を広げていけるようになるものと思われる。最初はなかなか子どもたちの輪に入って行けない子どもに対して担任の教師が個人的に援助することで子どもの社会性を伸ばしていき、更にクラス全体に対しても友達とどう関わるか指導していくことにした。なお、社会的スキル訓練は今まで児童期の子どもを対象に研究がなされており、幼児における社会的スキル訓練の研究は少なく、その効果的な訓練方法の開発も進んでいない。そのため、本研究では幼児を対象にした数少ない研究の1つである佐藤ら (1992a, b) の訓練法を参考に行った。

## 方 法

**被験児** 宮崎郡清武町にある本学附属清武みどり幼稚園の年中組の1クラス (男児13名、女児15名) の28名の園児である。

**調査期間** 1992年4月から7月にかけて行った。

### 援助の方法

① 特に引っ込み思案な子どもに対して、保育者が積極的に援助を行った。たとえば、「仲間に入れて」「一緒に遊ぼう」など、他の園児に受け入れられるためにはまず自分から言葉をかけるようにといった助言を行った。その時保育者は側で見守り、本人が難しいようだったら、一緒に言葉をかけながら繰り返し援助した。

② 全体に対しては、友達と仲良くするにはどうしたらよいか、「遊ぼう」と言われたらどうしてあげればよいかなどの質問をして、クラスの子ども全員で話し合ったり、ペープサートや紙芝居などを用いて子どもたち自身の問題に置き換えてみたりしながら、受け入れる方法を考えさせたり他の園児との接触の方法を話したりした。

### 社会性の測定方法

#### ① 友達調査（写真ソシオメトリック・テスト）

クラス全員（男女児別）の顔写真を個別に見せ、「一緒に遊びたい友達は誰かな」といった質問をして、子どもに同性の仲間から無制限に友達を選ばせた。4月下旬、5月下旬、6月下旬の3回行った。

#### ② 社会的行動評定

本行動評定はホップスら(Hops & Greenwood, 1988)の教師用社会的相互作用評定尺度(Social Interaction Rating Scale for teachers)を参考に作成された。8項目から成る調査表で、各項目1点から7点までの7ポイントで評定するようになっていた(Table 1)。各項目とも4点が平均的な子どもの位置するところで、1点に近いほど社会的相互作用が少なく、7点に近いほど社会的相互作用が多いことを示す。この社会的行動評定調査表をクラスの中と異年齢保育（ドリーミング・デー）の中で実施した。4月下旬、5月下旬、6月下旬の3回行い、クラスでは担任が評定し、異年齢保育の中ではその子どもの保育を担当した保育者が評定した。

Table 1 社会的行動評定調査表

項目	評 定 内 容	全くできない		どちらでもない			よくできる	
1	クラスの友達と言語での社会的やりとりができる	1	2	3	4	5	6	7
2	友達の中で自分から積極的に発言することができる	1	2	3	4	5	6	7
3	他の子どもの働きかけに積極的に応答することができる	1	2	3	4	5	6	7
4	同じクラスの子ども達と一緒に、積極的にゲームに参加 することができる	1	2	3	4	5	6	7
5	保育室の中で、リーダーシップをとることができる	1	2	3	4	5	6	7
6	30秒以上の長い会話をするすることができる	1	2	3	4	5	6	7
7	クラスの友達のグループに接近して、グループに入れる ように試みることができる	1	2	3	4	5	6	7
8	多くのクラスの友達と話をしたり、遊んだりすることが できる	1	2	3	4	5	6	7

#### ③ 性格検査

幼児・児童性格診断検査（高木・坂本，1962）の用紙を家庭に配布し、母親に記入してもらった。5月初旬、6月初旬、7月初旬の3回実施した。なお本性格検査は、1）顕示性、2）神経質、3）不安傾向、4）自制力、5）依存性、6）退行性、7）攻撃性、8）社会性、9）家庭適応、10）学校への適応の10項目の性格特性を測定すると同時に、体質傾向（体質的過敏性）も併せて診断するものである。

## 結 果

社会的行動評定（ドリーミング・デー）は1回目（4月下旬）と3回目（6月下旬）が同じ評

定者であったので、1回目と3回目だけを対象に分析した。また、担任の社会的行動評定は5月下旬と6月下旬の2回だけしかとれなかったため、その2回の評定結果を分析した。

### 社会的行動評定

#### 1) ドリーミング・デーの社会的行動評定

まず、ドリーミング・デーでの社会的行動評定の2要因混合（性×事前・事後テスト）の分散分析を行った（Fig. 1）。8項目の総合得点の分析を行ったところ、性差はなかったが、1回目に比べて3回目は有意に評定値が上がっており（ $F=5.56$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.05$ ）、社会性が高まっていることが示された。そこで、下位項目の分析を行ったところ、項目1と項目7において有意な差がみられた（順に、 $F=11.47$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.01$ ;  $F=12.26$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.01$ ）。また、項目2、項目3、項目4、項目6において有意な傾向がみられた（順に、 $F=3.13$ ,  $F=3.31$ ,  $F=3.28$ ,  $F=3.85$ , いずれも  $df=1/26$ ,  $p<.10$ ）。性差はいずれもなかった。なお、項目1においてのみ交互作用があった（ $F=6.34$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.05$ ）。単純効果の検定を行ったところ、1回目の男女児間および男児の事前・事後テストにおいて有意な差がみられた（順に、 $F=7.95$ ,  $df=1/52$ ,  $p<.01$ ;  $F=17.44$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.01$ ）。以上のように、男女児共にほとんどの項目で社会性が高まっていることが示された。

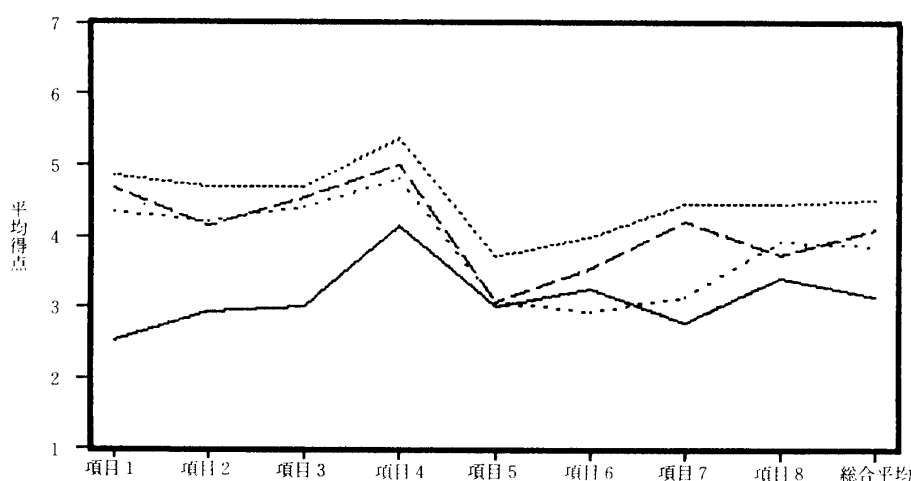


Fig. 1 社会的行動評定（ドリーミング・デー）

— 1回目（男児）    --- 3回目（男児）    ... 1回目（女児）    - - 3回目（女児）

#### 2) クラス担任の社会的行動評定

次に、クラスでの社会的行動評定の2要因混合（性×事前・事後テスト）の分散分析を行った。8項目の総合得点においては性差も社会性の変化もみられなかったが、項目5と項目7において有意な差がみられた（順に、 $F=6.65$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.05$ ;  $F=4.13$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.05$ ）。また、項目3と項目6において有意な傾向がみられた（順に、 $F=2.96$ ,  $F=3.98$ ,ともに  $df=1/26$ ,  $p<.10$ ）。クラスにおいても社会性が少しずつ高まっていることが窺える。なお、性差および交互作用はいずれもなかった。

## ソシオメトリック・テスト

4月・5月・6月に行った写真ソシオメトリック・テストの結果、男児の凝集性指数は0.038, 0.115, 0.064で、女児は0.038, 0.114, 0.143であった。男女児共に次第に凝集性が高まり、クラスのまとまりが良くなっていることを示している。発展性指数についてみると、男児の3回の結果は0.128, 0.263, 0.276で、女児は0.181, 0.343, 0.357と男女児共に次第に発展性が高まり、クラスの仲間関係が広がっていることを示す (Fig. 2)。個人毎にみた正の発展性指数の2要因混合(性×テスト試行)の分散分析を行ったところ、テスト試行の主効果がみられた( $F=17.43$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.001$ )。下位検定(チューキー法)の結果、1回目と2回目および1回目と3回目に有意差がみられた。男児の3回の平均が0.22であったのに対して女児は0.29と、女児の方が発展性が高いことを示しているが、統計的に有意な差はなかった。試行毎に個人の発展性も高まっており、一人ひとりの子どもの仲間関係が広がっていることを示している。

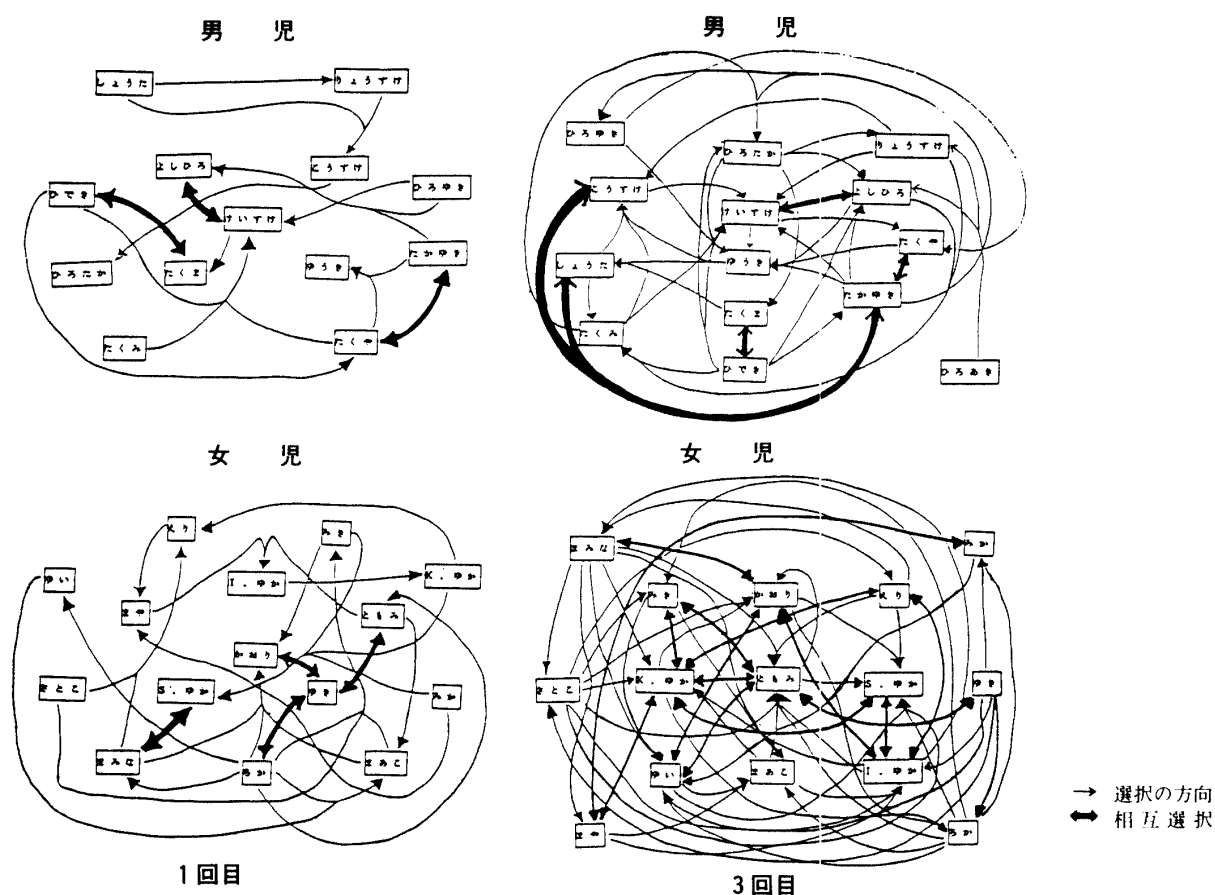


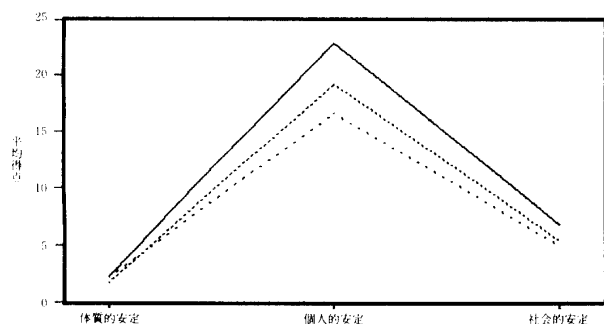
Fig. 2 男女児別の1回目と3回目のソシオグラム

## 性格検査

### 1) 総合的特性

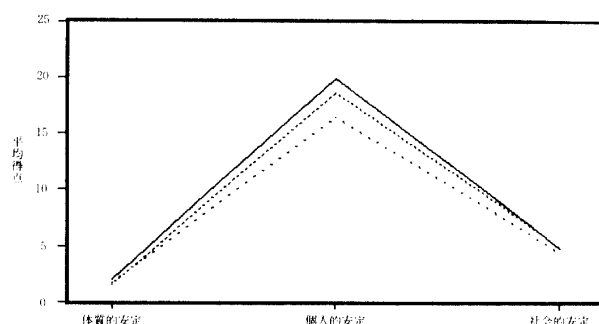
5月・6月・7月の3回に互って行った性格検査は、まず3つの総合的特性について2要因混合(性×テスト試行)の分散分析を行った。体質的安定・個人的安定・社会的安定の3つであるが、体質的安定は体質傾向の粗点で、個人的安定は顕示性から攻撃性までの7項目の粗点の合計

で、社会的安定は社会性から学校への適応までの3項目の粗点を合計したものである。体質的安定についてみると、テスト試行の主効果に有意な傾向がみられただけで ( $F=2.74$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.10$ ), 性差はなかった。個人的安定についても、テスト試行の主効果のみ有意であった ( $F=8.14$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.01$ )。下位検定の結果, 1回目と3回目に有意差があった。社会的安定についても、テスト試行の主効果のみ有意な傾向がみられた ( $F=2.59$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.10$ )。いずれの特性でも性差はみられていず, 訓練が進むにつれて男女児共に身体面および精神面が安定し, 社会性が高まってきたことを示している (Fig. 3, Fig. 4)。



**Fig. 3** 性格検査の総合的特性の結果 (男児)

— 1回目 --- 2回目 --- 3回目

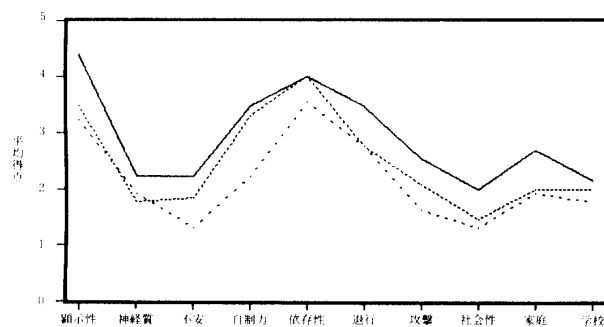


**Fig. 4** 性格検査の総合的特性の結果 (女児)

— 1回目 --- 2回目 --- 3回目

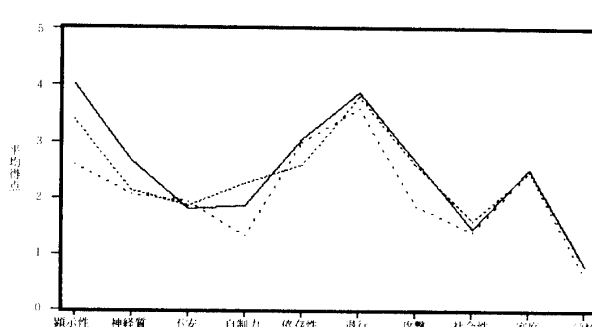
## 2) 各性格特性

総合的特性においていずれも有意差ないし有意な傾向がみられたので, 次に各性格特性毎に同様の2要因混合分散分析を行った。その結果, 顕示性・自制力・攻撃性においてテスト試行の主効果がみられ (順に,  $F=6.71$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.01$ ;  $F=4.65$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.05$ ;  $F=3.22$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.05$ ), 神経質において有意な傾向があった ( $F=2.73$ ,  $df=2/52$ ,  $p<.10$ )。下位検定を行ったところ, 顕示性では1回目と2回目および1回目と3回目に有意差がみられ, 自制力では1回目と3回目および2回目と3回目に有意差がみられた。また, 攻撃性では1回目と3回目に有意差がみられた。個人的安定の下位項目においてはいずれも性差がなかった。男女児共にわがまま・自己顕示・神経質傾向が減り, 感情の統制力や精神発達が良好になり, 攻撃性が低下してきたことを示している (Fig. 5, Fig. 6)。



**Fig. 5** 性格検査の各性格特性の結果 (男児)

— 1回目 --- 2回目 --- 3回目



**Fig. 6** 性格検査の各性格特性の結果 (女児)

— 1回目 --- 2回目 --- 3回目

しかしながら、学校への適応においては性差がみられ、女子の方が適応の良いことが示された ( $F=4.15$ ,  $df=1/26$ ,  $p<.05$ )。なお、社会的安定の下位項目においてはいずれも有意差がなく、はっきりとした社会性の変化が下位特性ではみられなかった。

#### 性格検査と社会的行動評定、ソシオメトリック・テストとの関連

性格と社会的な行動やクラス内での社会的地位との関係を調べるために、3回目の性格検査、社会的行動評定およびソシオメトリック・テストの相関をとった。その結果、個人的安定と社会的行動評定（ドリーミング・デー）との間に有意な相関があり ( $r=.37$ ,  $p<.05$ )、社会的安定と社会的行動評定（ドリーミング・デー）、社会的行動評定（担任評定）および指名数との間に有意な相関がみられた（順に、 $r=.46$ ,  $p<.05$ ;  $r=.64$ ,  $p<.01$ ;  $r=.38$ ,  $p<.05$ )。各性格特性についてみると、不安および退行と社会的行動評定（ドリーミング・デー）とに有意な相関があり（順に、 $r=.37$ ,  $r=.38$ , 共に  $p<.05$ )、不安および依存性と社会的行動評定（担任評定）との間に有意な相関がみられた（順に、 $r=.42$ ,  $r=.39$ , 共に  $p<.05$ )。また、社会性と社会的行動評定（ドリーミング・デー）および社会的行動評定（担任評定）との間に有意な相関があり（順に、 $r=.44$ ,  $p<.05$ ;  $r=.56$ ,  $p<.01$ )、学校への適応と社会的行動評定（担任評定）および指名数とに有意な相関がみられた（順に、 $r=.55$ ,  $r=.48$ , 共に  $p<.01$ )。

これらの結果は、社会性の高い子どもは不安が少なく、退行したり他者へ依存したりすることがあまりなく、情緒も安定しているなど精神面の成熟が良好なことを示す。また、社会性のある子ほど学校への適応が良く、クラス内での地位が高く、多くの友達から受容され、担任の評価も高いことを示している。なお、ドリーミング・デーと担任の社会的行動評定間には有意な相関がみられており ( $r=.43$ ,  $p<.05$ )、同じ子どもに対して担任以外の教師でも担任と同様の評定をしていることが示された (Fig. 7)。

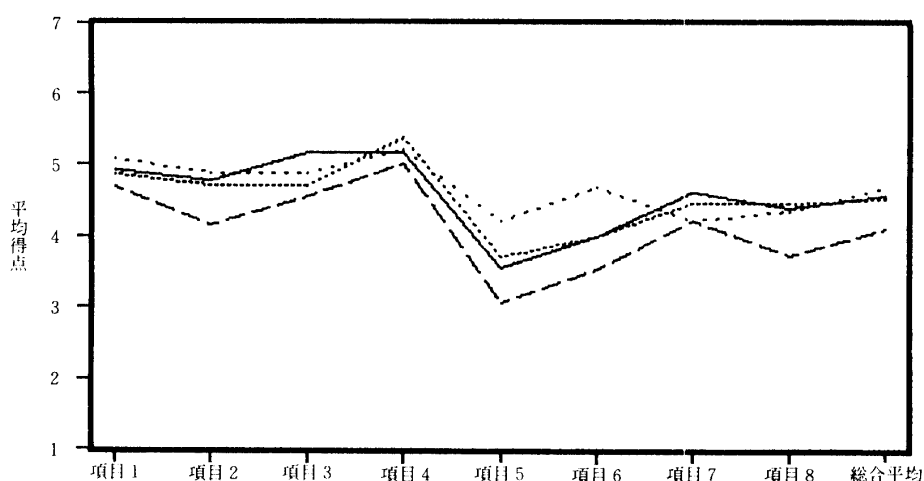


Fig. 7 社会的行動評定（評定者別男女児）

— 担任（男児）    ..... 他の教師（男児）    --- 担任（女児）    -.- 他の教師（女児）

## 考 察

本研究では、スキル訓練に伴う社会性の変化と性格の変化から訓練効果が調べられた。仲間関係の変化や社会性の変化は行動評定とソシオメトリック・テストによって測定された。行動評定の結果は、1回目と3回目の測定を比較したドリーミング・デーでは男女児共にほとんどの項目で社会的相互作用が増えており、仲間関係が豊かになり、社会性が高まったことを示している。それに対して、クラスでの担任の評定は2回目と3回目を比較したものであるが、ドリーミング・デーほどの大きな変化はなかった。しかし、項目によっては社会的相互作用が増えており、2回目から3回目にかけても少しずつ社会性が高まっていることが示された。ドリーミング・デーとクラス担任の社会的行動評定間には有意な相関がみられており、両者の結果の違いは評定者の違いによるものではなく、測定時期の差によると考えられる。教師の関わりの多い最初の段階ほど子どもの変化が大きく、次第にフェード・アウトしていくにつれて仲間関係が重要になるものと思われる。そうした変化の生じる時期では社会的発達が一時的に停滞するものと考えられる。ソシオメトリック・テストの結果においても同様の現象がみられており、凝集性指数も発展性指数も1回目から2回目にかけての変化が大きく、正の発展性指数の分析でも1回目と2回目および1回目と3回目に有意差がみられている。最初の1カ月でクラスの仲間関係が大きく広がり、一人ひとりの子どもの仲間が増えていることを示している。いずれにせよ、幼児における社会的スキルの訓練は Mize & Ladd (1990) の指摘にあるように効果的なことが示唆された。

性格面での変化をみるために幼児・児童性格診断検査を行ったが、その結果情緒が安定し社会性が高まってきたことが示された。これも1回目から3回目の変化が大きく、2回目と3回目ではそれほど変化しなかった。性格面では特に顕示性・自制力・攻撃性が有意に変化しており、男女児共にわがまま・自己顕示・神経質傾向が減り、感情の統制力や精神発達が良好になり、攻撃性が低下してきたことを示している。社会的スキル訓練の目標は、協調的なやり取りを高め、攻撃性を減少させようとすることにあり、訓練に伴ってそうした性格が目標の方向に変化していることを示唆している。ただ、社会性については性格検査の結果でははっきりとした変化が下位特性ではみられていず、社会的スキルと社会的性格とは一義的に関係しないことが考えられる。

そこで、性格検査と行動評定およびソシオメトリック・テストの結果の関連を調べるために、両者の相関をとった。変化後の関係を調べるため3回目の結果の相関をとることにした。その結果、情緒の安定と社会的行動評定との間に有意な相関があり、社会的安定と社会的行動評定および指名数の間に有意な相関がみられた。性格検査の下位分析でははっきりとした関係がみられなかった社会的性格と社会的行動に関連のあることが示された。この結果では、社会性の高い子どもは不安が少なく、退行したり依存したりすることがあまりなく、情緒も安定しているなど精神面の成熟が良好なことが示された。また、社会性のある子ほど学校への適応が良く、クラスでの地位が高く、多くの友達から受容されていることが示された。訓練に伴ってすぐに社会的性格が変わるとは限らないが、少なくとも社会性は高まっており、性格も徐々には変化することが考えられる。しかも、社会性の高い子どもは精神の成熟が良好で、園での適応が優れていることが示されており、社会的スキル訓練を施すことによって友人関係や幼稚園などの集団生活での適応が



高まることを示唆する。

## 付 記

本研究に御協力頂いた本学附属清武みどり幼稚園の先生方並びに園児の皆さんに深く感謝いたします。また、本研究にあたり幼児の訓練指導に貴重な助言を頂きました宮崎大学教育学部 佐藤正二助教授にも厚く御礼を申し上げます。

## 引 用 文 献

- Hartup, W.W. 1983 The peer system. In E.M.Hetherington (Ed.) *Handbook of child psychology : Vol.4. Socialization, personality, and social development (4th ed.)*. New York : John Wiley.
- Hops, H. & Greenwood, C. R. 1988 Social skill deficits. In E. J. Mash & L. G. Terdal (Eds.) *Behavioral assessment of childhood disorders (2nd ed.)*. New York : Guilford Press.
- Ladd, G. W. & Price, J. M. 1987 Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development*, 58, 1168-1189.
- Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social skills assessment and training with children*. New York : Plenum Press. 高山 巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一（訳） 1987 子どもの対人行動：社会的スキル訓練の実際 岩崎学術出版
- Mize, J. & Ladd, G. W. 1990 Toward the development of successful social skills training for preschool children. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.) *Peer rejection in childhood*. New York : Cambridge University Press.
- Mize, J., Ladd, G. W., & Price, J. M. 1985 Promoting positive peer relations with young children : Rationales and strategies. *Child Care Quarterly*, 14, 221-237.
- Rinn, R. C. & Markle, A. 1979 Modification of social skill deficits in children. In A. S. Bellack & M. Hersen (Eds.) *Research and practice in social skills training*. New York : Plenum Press.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1992a 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練——社会的孤立行動の修正——行動療法研究（印刷中）
- 佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 1992b 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練——コーチング法の使用と訓練の般化性——行動療法研究（投稿中）
- 鈴木順和 1991 幼児における運動能力と性格の関連 宮崎女子短期大学紀要 17, 137-148.
- 高木俊一郎・坂本竜生 1962 幼児・児童性格診断検査の手引 金子書房
- Waldrop, M. F. & Halverson, C. F. 1975 Intensive and extensive peer behavior : Longitudinal and cross-sectional analyses. *Child Development*, 46, 19-26.

〔1992年12月10日受理〕